

# 中学校との円滑な接続を図る小学校外国語活動の展開 —望ましい文字指導の在り方—

松田 浩二

小学校第5・6学年で外国語活動が必修化され、「コミュニケーション能力の素地を養うこと」を目標に、聞くこと、話すことを中心とした活動が進められている。一方中学校英語では読むこと、書くことが加わり、文字に対して苦手意識をもつ生徒もいる。小学校の時期に文字に親しみ、文字に対する抵抗感を軽減することで小中の円滑な接続が図れるのではないかと考え、望ましい文字指導の在り方を探ることとした。意識調査から、小学校高学年は文字に興味を示す発達段階にあること、また、中学生が小学校での文字学習を望んでいたことも分かった。そこで、文字の視覚的なイメージをもたせることを目標に文字指導の活動例と教材を開発し、授業実践や教員対象の研修に取り組んだ。本研究で開発した文字指導例は無理なく楽しく活動に取り組み、児童がアルファベットに慣れ親しむことにおいて効果的であった。

〈キーワード〉 小学校外国語活動、共通教材、文字指導、小中連携

## I 主題設定の理由

平成23年度より小学校第5・6学年で毎週1単位時間の外国語活動が必修化され、「コミュニケーション能力の素地を養うこと」を目標に、聞くこと、話すことを中心とした活動が進められている。今後は2年間にわたる外国語活動を小学校で経験した生徒が中学校に入学することになる。

中学校英語では読むこと、書くことが加わり、4技能の定着が求められる。特に中学校の入門期において文字に対する負担感が大きく、それがもとで英語に対して苦手意識をもつ生徒もいる。

小学校で文字に親しむ機会を増やし、文字に対する抵抗感を少しでも軽減するような「望ましい文字指導の在り方」を探ることで、小学校外国語活動から中学校英語へのより円滑な接続が図れるのではないかと考え、本主題を設定した。

## II 研究の目的

小学校外国語活動の効果と中学校との接続における課題を明らかにし、課題を解決するための具体的な指導例の開発を通して、中学校との円滑な接続を図る小学校外国語活動の在り方について探る。

## III 研究の方法

- 1 児童・生徒、小・中学校教員の意識調査から小学校外国語活動の効果と課題を把握する。
- 2 共通教材“Hi, friends!”を生かした文字指導の教材を開発する。
- 3 研究協力校で授業を実践し、開発した文字指導例の効果を検証する。
- 4 中学校との円滑な接続を図るための小学校での指導のポイントを中心に、教員研修で伝達する。

## IV 研究の内容

### 1 小学校外国語活動の効果と課題の把握

- (1) 小学校5・6年生の意識調査から

調査A(時期:平成23年6月、対象:福井市の小学校5・6年生463名)

「外国語活動の時間は好きか」という問いに対して、5年生の91.7%の児童が「好き」「どちらか

と云えば好き」と回答している。6年生は72.9%だが、「好き」だけで見ると5年生の70.4%から、6年生の32.8%へと半減する(図1)。これは英語に対する新鮮さが薄れてくることや英語に対して苦手意識が生まれることが理由として考えられる。

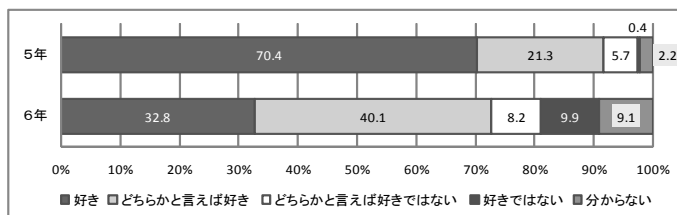


図1 外国語活動の時間は好きか

外国語活動で児童が楽しいと感じることは、5・6年生とも「ゲーム」「ALTとの活動」「外国の文化を知ること」の順になっている。6年生の第4位は「文字を書くこと」であり、5年生より順位が一つ上である。6年生になると、楽しいと感じている割合がかなり減少傾向となるが、文字を書くことについて大幅な減少は見られない(図2・3)。児童の知的好奇心に合うように文字を取り入れることは、発達段階に即していると考えられる。

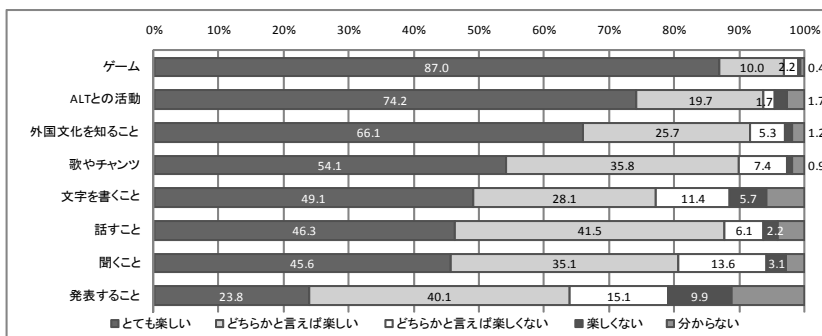


図2 外国語活動で楽しいこと(5年)

外国語活動の授業を見ていると、アクティビティーの途中で黒板に書かれた対話の英文に目をやる児童の姿を見かける。各学校では絵カードのほとんどに文字が併記されており、それらは低学年からの英語活動でも活用されている。また単元の主要表現を英文で黒板に提示する授業も多く見られるようになってきている。活動の表現が文字で表されていたり、単語の絵カードに文字があったりすることについて活動しやすいかという問いに、「文字を読んでいる」「文字があった方が分かりやすい」と答えた児童は6割を超えている(図4)。児童は文字をコミュニケーションの助けにしているようである。

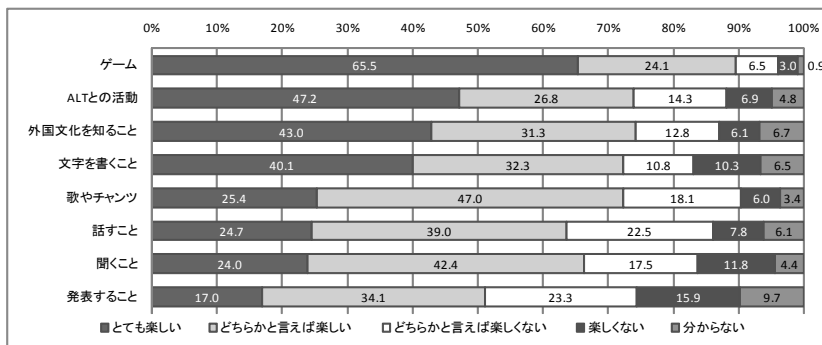


図3 外国語活動で楽しいこと(6年)

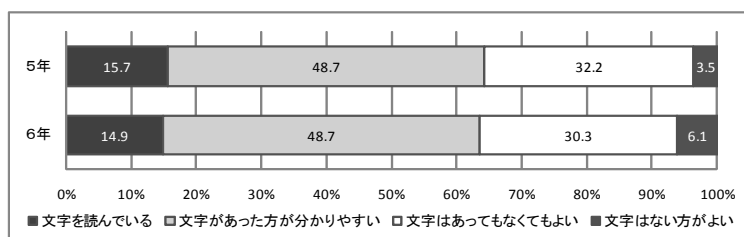


図4 英語が書いてあると活動しやすいか

(2) 中学生の意識調査から

調査B(時期:平成23年6月、対象:福井市の中学校1・2年生561名)

調査C(時期:平成22年11月、対象:全国の中学校1年生2688名、実施:ベネッセ)

◎小学校の外国語活動について中学校に入って役立つと思うこととして、「アルファベットの読み書き」が4割を超えている。(調査B)

▼小学校の卒業までにやっておきたかったことの第1位で「英単語を書くこと(33.1%)」、第3位で「英単語を読むこと(26.9%)」を挙げている。(調査C)

▼英語ノートで印象に残ったレッスンとしてアルファベットの大文字は中位であるが、小文字は最下位である。(調査B)

中学校では単語のスペルを覚えるのに苦労している生徒が多く、それが英語を苦手とする要因の一つであることが考えられる。小学校外国語活動の目的は英語の技能を定着させることではないが、小学校でも、楽しく文字に親しませる活動を工夫していく必要があると思われる。

(3) 中学校英語科教員に対する調査から

調査D（時期：平成22年11月、対象：沖縄県の中学校教員、実施：大城 賢『小中連携Q & Aと実践』）  
外国語活動を受けてきた生徒は従来に比べどのような変化があるかについての調査で、中学校英語科の教員は外国語活動の成果を次のように捉えている。

- ◎英語を聞く力が高くなっている。日常的に使ったクラスルームイングリッシュが理解できる。
- ◎ALTに対して抵抗感がない。物怖じしない。
- ◎活動で使った単語をよく知っている。語彙が豊富である。
- ◎スピーキング力が高く、積極的にコミュニケーションを図ろうとしている。
- ◎Eye contact、Clear voiceを意識するなど、コミュニケーションの態度がよい。

また、筆者が中学校教員から直接聞いたところによると、「文章をそのまま書き写す力に課題が見られる」「英語に限らず国語の視写の力を付けることが望ましい」という意見があった。また、国立教育政策研究所の調査で「漢字を覚えたり書いたりすることが好きだ」と答えた生徒は、「英語の文字を書くことが好きだ」と答える割合が高いという、国語との相関を示す結果も出ている。

(4) 小学校教員に対する小中連携に関するアンケートから

直山(2012)は外国語教育における小中連携の段階は三つ、交流には4種類あるとしている(図5・6)。この考え方を基に小中連携に関する実態調査を行った。

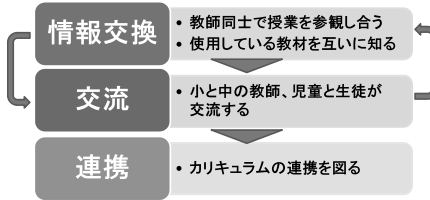


図5 小中連携の三段階

図6 交流の4種類

調査E（時期：平成24年8月、対象：福井県の小学校外国語活動担当教員191名）

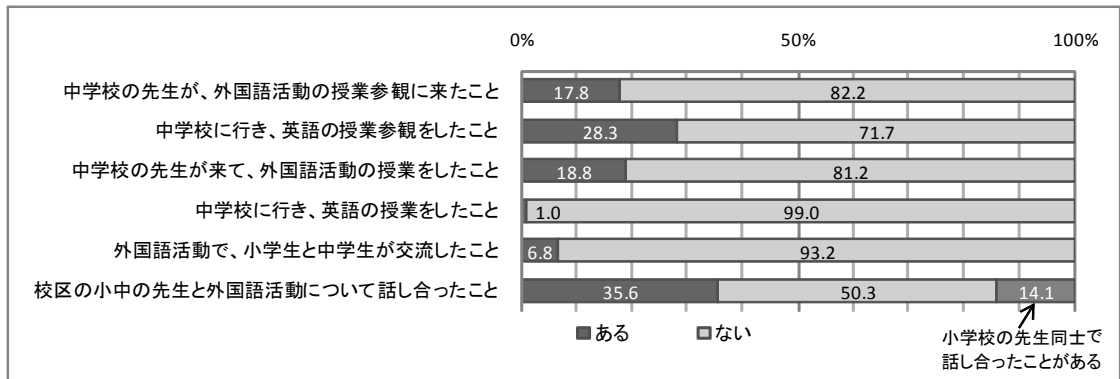


図7 どのような小中連携が進められているか

【小中連携に関する小学校教員の自由記述】

- ・小中の目的や指導内容、活動を互いに熟知した上で、何が連携できるか考える必要がある。小学校で付けた力を生かして、中学校でのスキル向上につなげていく。
- ・中学校の授業を見ることで、スキルが学べる。生徒の様子を知ること、小学校で触れておくことよい事項を把握することが、児童の学習意欲の向上につなげることができる。
- ・話すことはうまくいっているが、書くことに抵抗がある。小6でローマ字を指導する。中学校で小学校を思い出せるように、中学校にもHi, friends!のデジタル教材やカードなどを配布する。

- ・継続的な会議を毎年することで共通認識と連携が深まる。中学校区の小学校の英語のレベルをそろえることが大切。
- ・小学校で英語は楽しいというイメージをもたせ中学校に送ることが大事。小学校で英語嫌いを作っていることもある。
- ・小中ともに多忙のため、時間の確保ができない。小中それぞれの求めるもの、ねらいが違うので連携は難しい。
- ・小学校は楽しく興味をもつ、中学校ではいきなり学力という教科指導になる。小学校でもスペルや単語、文法なども教えていかないとギャップが進んでしまうのではないか。

自由記述では多くの教員が連携の必要性を感じていると述べているが課題も多く、実際には十分に交流ができていないことが分かる(図7)。

(1)(2)(3)(4)のアンケートの結果をまとめると、生徒がアルファベットの学習を望んでいたことや、5・6年生は文字に興味をもつ段階にあることが分かった。また、教員のアンケートからは、中学校で書くことに抵抗をもつ生徒がいるため小学校でも実態に即して文字に親しませていくことが必要ではないかという考え方があることも分かった。そこで、文字指導を工夫することで円滑な接続が図れるのではないかと考え、アルファベットを扱った教材の開発を試みた。その際、直山(2011)の小中連携の三要素「目標の一貫性」「内容の系統性」「指導法の継続性」を基に考えた。これらを達成していくことで小中の円滑な接続が図れるとされる。

「目標の一貫性」について、小中ではねらいが違うため連携が難しいという誤解も依然としてあるが、改めて学習指導要領を確認すると「外国語を通じて」「コミュニケーション能力を養う」という共通した目標が高校まで一貫して規定されている(表1)。そこで小学校外国語活動の目標が十分達成されるような活動となるよう心掛けた。「学習内容の系統性」については、文部科学省が作成した共通教材等の使用で系統性が図られる。中学校の学習内容を前倒しすることなく、共通教材を活用し、その内容を発展させることで児童の興味・関心を高める教材となるよう配慮した。「指導法の継続性」については、中学校側からのアプローチが必要であるが、中学校入門期でも活用できるような教材と指導例を開発した。以下、文字指導の具体例を述べていく。

表1 学習指導要領の目標

小学校外国語活動	中学校外国語
外国語を通じて、	
言語や文化について 体験的に理解を深め、	言語や文化に関する 理解を深め、
積極的にコミュニケーションを図ろうとする 態度の育成を図り、	
外国語の音声や基本的な 表現に慣れ親しませながら コミュニケーション能力の 素地を養う。	聞くこと、話すこと、 読むこと、書くことなどの コミュニケーション能力の 基礎を養う。

## 2 共通教材を活用した文字指導例

### (1) 学習指導要領に見る文字の取扱い

文字の取扱いに関して「小学校学習指導要領解説 外国語活動編」p.19で次のように示されている。

- ・アルファベットなどの文字や単語の取扱いについては、児童の学習負担に配慮しつつ、音声によるコミュニケーションを補助するものとして用いる。
- ・アルファベットなどの文字の指導については、例えば、アルファベットの活字体の大文字及び小文字に触れる段階にとどめる。
- ・読むこと及び書くことについては、音声面を中心とした指導を補助する程度(略)。
- ・アルファベットなどの文字指導は、外国語の音声に慣れ親しんだ段階で開始するように配慮(略)。
- ・発音と綴りとの関係については、中学校学習指導要領により中学校段階で扱うものとされており、小学校段階では取り扱うこととはしていない。(下線筆者)

アルファベットに関連する指導事項であるローマ字について、「小学校学習指導要領解説 国語編」p.72に次のように示されている。

- ・第3学年においては、日常使われている簡単な単語について、ローマ字で表記されたものを読み、また、ローマ字で書くこと。「日常使われている簡単な単語」とは、地名や人名などの固有名詞を含めた、児童が日常目にする簡単な単語のことである。

ローマ字の指導は小学校第3学年の国語科で5時間程度である。各教科等でコンピュータのキーボ

ードをローマ字で入力することがあるものの継続してローマ字にふれているわけではなく十分定着しているとは言えない。また、ローマ字と英語表記の違いが生徒のつまずきになるという見方もあるが、中学校英語教員からローマ字の習得を望む声も依然としてある。英語の授業でローマ字読みを頼りにして単語の綴りを覚えようとする生徒やそのような指導をする教員もいる。アレン玉井(2010)はアルファベットの小文字とローマ字の理解力には関連があると述べており、筆者もローマ字の習得は英語学習への円滑な接続に必要なことと考える。

文字の指導について各小学校の実態を見ると、絵カードには文字も併記されており、耳から入った言葉が視覚情報として絵とともに入ってくる。高学年になると「読む」ことに関して、絵を手がかりにして単語カードを選んだり、対話で詰まったときに黒板に英語で書かれた主要表現を読んだりすることがある。調査Cで「小学校卒業までにやっておきたかったと思ったこと」について「英単語を書くこと」が33.1%で1位、「英単語を読むこと」が26.9%で3位、「英語の文を書くこと」が26.7%で4位と、英単語・英文の読み書きへの興味がうかがえる。

(2) 共通教材に見る文字の取扱い

次に文部科学省が学習指導要領に沿って作成した共通教材での文字の取扱いについて見てみたい。平成21年度から全国の小学校に「英語ノート」が配布されたが、英語ノートの活用実績や使用する中で出てきた課題などを踏まえ、平成24年度に新たな共通教材“Hi, friends!”が配布された。注目すべきは文字の取扱いが大きく変わったことで、英語ノートではLet's singで歌詞の英文が書かれている程度であったが、Hi, friends!では単元名も“Do you have 'a'?”など全て英文で表すようになった。Lesson 7 “We are good friends.”は桃太郎の劇を演じる単元であるが、主要な台詞“We are strong and brave. Let's go to Onigashima.”等の英文が物語の流れに沿って示されている。このHi, friends!は英語ノートの活用研究協力校での実践を基に改良が加えられたもので、全国の小学校教員の意見が活かされており、英語の表記があることが児童の活動の助けになるという声を文部科学省が具体化したものと思われる。

共通教材は、小中連携の観点から各中学校にも配布されている。中学校英語科の教員にとって1年生の入門期(4・5月)指導の参考になるものであるが、文字表記がほとんどない児童用では活動内容がつかめず、指導編を読む必要があり、活用とまでは至っていないのが現状のようである。

児童生徒の意識や発達段階、教員の思いや文部科学省の意向を考えると、小学校で文字指導を行うことは適切であると考えられる。外国語活動の目標が果たせるよう文字指導の際には以下を配慮した。

- ・体を使って表現する体験的な学習を中心にして、音声と文字の形のイメージを豊富に残す。
- ・ゲーム性のある楽しい活動にする。                      ・ペアやグループでふれあい、協力できるようにする。
- ・言語に関する気付きがあるようにする。                  ・児童の創意工夫が活かされるようにする。
- ・英語を使って対話ができるようにする。                  ・活動ごとに親しむ文字を焦点化する。

(3) アルファベット大文字の指導例

- ① 単元名 「アルファベットで遊ぼう」(英語ノート2 Lesson 1)第6学年 H21~23  
「アルファベットをさがそう」(Hi, friends! 1 Lesson 6)第5学年 H24
- ② 目標 ・積極的にアルファベットの大文字を読もうとする。  
・身の回りにアルファベットで表現されているものがあることに気付く。
- ③ 活動で取り扱う文字の選定について

教材作成の際は児童に親しまれていない文字を取り上げ、多くの文字に慣れ親しむことができるようにした。取り扱う文字を選定する際には、平成19・20年に国立教育政策研究所が実施した「文字指導を実施している小学校の5・6年生約400名」対象の調査を参考とした。

【国立教育政策研究所調査の内容】

- ・ Mの音を聞き、その大文字を書く時、Mと正答した児童の割合は65.9%、N-16.5%、L-3.3%となっている。
- ・ 同様にDが正答の時、D-65.2%、T-32.2%、B-0.9%など、長音[-i:]で混同が見られる。
- ・ 文字を書く設問では、FDJNに鏡文字が見られる。
- ・ Xはローマ字では扱わないが100%近い正答率がある。

LMは服やファーストフードのサイズの表記で目にするものの音声的に混同がある。日本語ではエル、エム、エヌと発音され、2音目に着目して聴き分けているが、英語では[él, ém, én]のように子音で終わるため判別が難しい。CD、DVD、VSなど児童の生活に身近なもの、選択肢でよく目にするABCは児童に親しまれているため、扱いを軽くした。

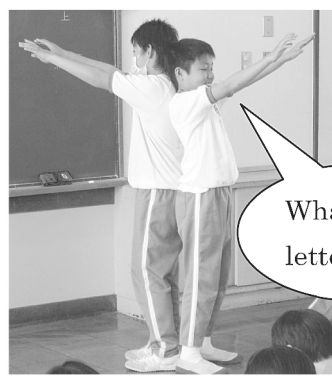
指導例では活動ごとに扱う文字を変えていくことで、児童の印象に残るように配慮した。なお、児童に提示するアルファベット文字のフォントは、共通教材に近い「教科書体」を用いた。

**アルファベットソング** 日本語の音と違うアルファベット(C、Z、Vなど)に気を付けて聴く。文字を指さしながら歌う。歌を聴きながら、カードをアルファベット順に並べる。\*順番通りに歌えることを大切にすることが、PQR、ZYXから歌い始め、終わりの文字も意識づける。

**ポインティングゲーム** ALT等が言った文字をHi, friends! 1 p. 22、23の絵の中から探して、できるだけ速く指さした方が勝ち。続いて指さし指残しゲームをする。

**マッチングゲーム** アルファベットの文字を様々な線で2分割したカードを1枚ずつ持ち、文字を完成させるためにもう半分のカードを持っている児童を探す。(ABCDE、S以外を使う)  
A: Do you have "Q"? B: Yes, I do. 文字を完成させたペアは、次の文字当てクイズに移る。  
B: No, I don't. I'm sorry. 相手が見つかるまで、繰り返す。

**文字当てクイズ** マッチングゲームで出会ったペアで完成させた文字を、体で表す。2人の体全体を使って、文字を作る。他のペアの考えた文字を見て、他の児童はどの文字か当てる。



文字か当てる。  
\* 小文字は自分から見た形を手で作る。

What's this letter?

(社南小学校での実践)

**ロゴタイプファクトリー** 店や商品のロゴの文字を見て、何のロゴかを当てる。答えが分かった児童は、ジェスチャーをする。そのジェスチャーが他の児童のヒントになる。グループで答える。

What's this?

①はじめに見せる

②ヒントになる画像を見せる

③答えを見せる

**ロゴタイプファクトリーのルール**

アルファベットを見て、何のロゴか当ててください。  
 答えが分かって、お口は×。  
 分かったらジェスチャーをしよう。  
 答えはグループのみんなでいっしょに発表。

(4) アルファベット小文字の指導例

- ① 単元名「いろいろな文字があることを知ろう」(英語ノート2 Lesson 2)第6学年 H21~23  
「アルファベットクイズを作ろう」(Hi, friends! 2 Lesson 1)第6学年 H24
- ② 目標
  - ・積極的にアルファベットの小文字を読もうとする。
  - ・アルファベットの大小文字を対応させる。
- ③ 活動で取り扱う文字の選定について

【国立教育政策研究所調査の内容】

- ・最も混同が見られたのは音声的にも形態的にもb/dである。
- ・読み方を聞いてbを選ぶ問いでは、b-67.4%、d-28.3%となっている。
- ・読み方を聞いて小文字のqを選択する問いでは92.2%と高い識別率であるが、大文字Qを見て小文字qを選択する問いでは、b/dの混同に次いで正答率が低かった。
- ・読み方を聞いて、小文字vを選択した児童の割合は64.3%であり、z-26.5%との混同が目立った。

読み方から小文字qを多くの児童が選択できたのは、アラビア数字の9に音と形が似ているためであろう。大文字のQから小文字のqを選択する問いでは正答率が低かったことから分かる。zはg、vはbとの聞き分けが難しい。日本語でvはブイ、zはゼット等と読むが、米語では[vi:] [zi:]と共に長音になり、音声的に類似していることと耳慣れない発音であることが混同する要因として考えられる。

まとめると小文字では特にb/d、p/q、t/fで混同が見られる。また、小文字の中でも大文字と形が似ているCc、Kk、Oo、Pp、Vv、Ww、Xx、Zz等の扱いは軽くして他の小文字に親しめるようにした。

英文のほとんどは小文字であるが、児童にとって小文字は大文字ほど親しまれていない。また、大文字に比べ小文字は弁別の特徴が少ないため、小文字の教材作成上の留意点として文字の高さを意識できるように英語の罫線を示し、文字の混同を防ぐためb-d、p-q、n-uには下線を引いた。

**仲間分けゲーム** 形に注目して小文字の仲間分けを行う。

「座りやすそうな文字は?」「水がたくさん入りそうな文字は?」等の問いに、グループで協力してカードを分類する。いくつかの仲間分けを紹介した後、他にどのような仲間分けができるかグループで考える。そのテーマを基に、他のグループも分類をする。

(例)腕に通せそうな文字、大文字と形が似ている文字、投げたらブーメランのように戻ってきそうな文字。

**鏡に映して  
同じに見える小文字は?**

大文字でもいくつかありましたね。

**S, Z** は、違うかな...

鏡は割らないように、安全に使おう!

**小文字アップ&ダウン**

小文字のカードをパラパラ漫画にして見せ、文字の高さによって三つに分類できることに気付かせる。2階建ての文字-b、d...。1階建ての文字-a、c...。地下室の文字-g、p...。点のある文字-i、j。文字の高さに合わせて次の動作をする。2階建ての文字→立つ、1階建ての文字→椅子に腰掛ける、地下室の文字→床にしゃがむ、点のある文字→拍手を加える。アルファベットソングを歌いながら、動作を付ける。曲のテンポを上げる。4線のうち上から1線目は空を表す青、3線目は太線、4線目は地面を表す赤色にし、判別の助けとした。

**伝言スペリングリレー**

グループの代表の児童に、ある単語のアルファベットを見せる。(例o、p、s、t)最初の児童は見た文字をグループの他の児童に伝える。グループの最後の児童が、聞いた文字をカードから取り出す。グループで協力して、その文字を並べ替えて言葉を作り、黒板に掲示する。\*文字から語にするとときに難しくなるため、綴りの要素を取り入れた。取り上げる単語はHi, friends!2 p. 4、5にある単語-coffee、postを中心に、ローマ字の習得がスペルを覚えるのに役立つ例として、lemon、japanなども加えた。



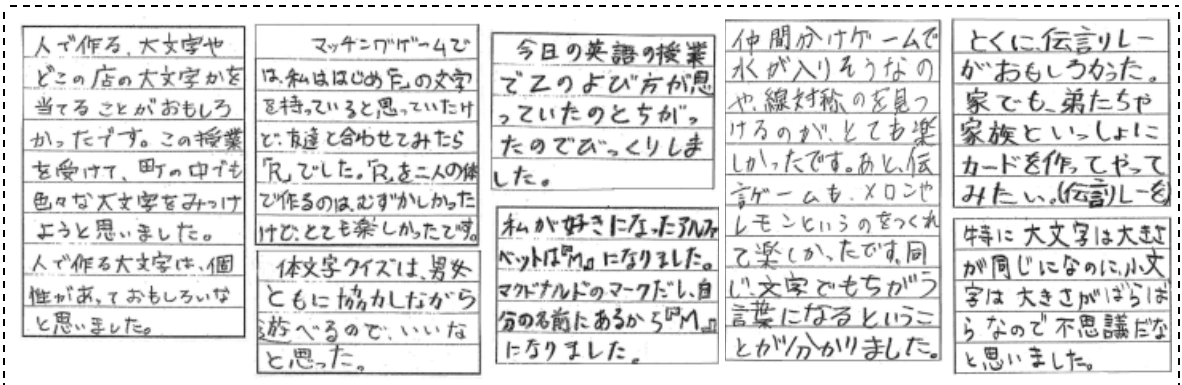
(社南小学校での実践)

3 授業実践と考察

平成24年5月16日～25日に福井市社南小学校の第6学年4クラス計136名の児童を対象に、2つの指

導例について各クラス4時間程度の授業実践を行った。1クラスは筆者が行い、他のクラスは各担任が行った。児童の感想からは、文字に対する興味関心の高まりや活動への意欲が読み取れる。

【児童の感想】



本実践はHi, friends!の単元順に行ったが、文字を扱う単元を卒業前に復習することで児童は記憶に新しいまま中学校に入学することができる。また、年度初めに文字に対する興味をもたせ、その後の単元で継続的に慣れ親しませることでアルファベットの知識が残りやすくなる。このように指導時期を変えたり、帯取りで復習したりすることも、中学校との接続を意識する上で効果的である。

4 教職員研修講座の実施とその効果

平成24年8月2日、福井県教育研究所で外国語活動の研修講座を行った。演習で提案した二つの文字指導例は受講者の学校でも実践され、講座2か月後のアンケートには以下の意見が寄せられた。

- ・Hi, friends! Lesson6の「アルファベットの文字に親しもう」の指導案通りに行いました。マッチングゲームや体文字クイズ、ロゴタイプファクトリー等、児童はいつも以上に意欲的に活動していました。また、授業後の感想で文字について関心をもつ児童が出てきました。外国語活動に対する意識が、学ばせるから児童と一緒に楽しく学ぶへと変わってきたような気がします。
- ・活動例やパワーポイントをそのまま使わせていただきました。子どもたちの活動が活発になり、子どもも教師も今までより楽しんでできるようになりました。中学校区の研修で、研修講座の内容を報告しました。
- ・中学校でもいただいたパワーポイントを活用してウォームアップをしており、生徒も楽しみながら取り組んでいます。
- ・小中連携について、今までは「ローマ字をしっかりやらせて欲しい」ということだけでしたが、折に触れ、繰り返し練習したり取り入れたりすればよいのだと分かりました。



(研修講座の様子)

アンケートの記述から、研究協力校以外の学校においても本指導例の効果がうかがえる。本講座には中学校教員の受講もあり、外国語活動の趣旨を理解して小学校で行ったような活動を授業に取り入れている。中学校教員の受講者がさらに増えることで、指導法の継続が図られることが望ましい。

V 研究のまとめ

文部科学省の直山教科調査官が「小学校外国語活動の最大の課題は小中連携である」と言うように、その必要性はますます高まっていくであろう。研究発表会での協議内容を受け、小学校外国語活動と中学校英語の入門期でこれから大切にしていかなければならないことを述べて、本稿のまとめとする。

1 小学校外国語活動で大切にしたいこと

- ・人に関心をもち、人とふれあうことを楽しいと感じ、相手が何を伝えようとしているのかを理解しよ



うと積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を養うと共に、Eye contact、Nice smile等コミュニケーションのマナーを身に付ける。

- ・活動で使う様々な語彙にふれ、クラスルームイングリッシュに親しませる等、豊富な音声イメージを残し、聞く力を高めていく。新たな単元でも既習事項が生かせるような活動を組み立てたり、活動の際は対話を繰り返したりして、英語を使う機会を増やし、場面と共に語彙を豊かにする。
- ・英語の「読み、書き」に対する抵抗感を少なくするために、児童の実態に合わせて文字に親しませる。
- ・中学校の英語の授業を参観することで、生徒の姿から外国語活動で身に付けた力を捉えたり、中学校の英語科に円滑に接続するために、児童が身に付けておくといふ力を明らかにする。また、指導者が子どもの頃に受けてきた英語の授業とは違う新しい視点で工夫された授業を見ることで、外国語活動の指導に生かすことができる。

## 2 中学校英語入門期(4・5月)で大切にしたいこと

- ・小学校で行ったようなキーワードゲームやクイズを取り入れる等、指導法の継続を図ることで「小学校でやったことがある活動だ。」「このクイズのやり方知っているよ。」と小学校外国語活動が役立っていることを生徒に実感させる。
- ・共通教材に出てくる表現のほとんどは中学校1年で使用されるため、小学校で使った表現を生かしながらコミュニケーションの場面を設定する。その中で「英語で自己紹介ができて、素晴らしい。」「カブはturnipだって知っているんだ。すごい。」等、入学して間もない生徒のコミュニケーションしようとする態度や英語の力の良い面を言葉で評価し、生徒に英語ができるという自信をもたせる。

以上、小学校外国語活動と中学校英語の円滑な接続を図る上で大切にしていかなければならないことをまとめてみた。小学校外国語活動の成果は中学校の英語に表れると言われるが、数値を用いて示すことは難しい。また、小中共に多忙な中、連携の時間を生み出すことも現実的には難しいことではあるが、校区の小中学校で互いの成果と課題を理解していくことが大切である。本稿では小学校での文字指導の提案を行ったが、更に中学校入門期での指導法に焦点を当てた実践を進めていくことで、より円滑な接続が図られると考える。

本研究の実施に当たり、意識調査や授業研究に御協力くださった福井市社南小学校、社西小学校、至民中学校、社中学校の先生方、研究発表会に参加して貴重な御意見をくださった先生方、アンケートに御回答くださった研修講座ならびに指導者養成研修受講の先生方に、心より厚くお礼申し上げます。

### 《引用文献》

- 文部科学省(2008)『小学校学習指導要領』『中学校学習指導要領』
- 文部科学省(2008)『小学校学習指導要領解説 外国語活動編』東洋館出版社
- 文部科学省(2009)『英語ノート1・2』『英語ノート1・2 指導資料』
- 文部科学省(2012)『Hi, friends! 1・2』『Hi, friends! 1・2 指導編』
- 国立教育政策研究所(2009)『小学校における英語教育の在り方に関する調査研究(成果報告)』
- Benesse教育研究開発センター(2012)『小・中学校の英語教育に関する調査(速報)』

### 《参考文献》

- 樋田光代(2008)『小学校英語ポップ・ステップ・中学!』文溪堂
- 直山木綿子他(2012)『小中連携 Q&Aと実践 小学校外国語活動と中学校英語をつなぐ40のヒント』開隆堂
- 渋谷徹・佐藤貴子(2010)『英語ノート・6年 35時間のTeacher Talk』明治図書
- アレン玉井光江(2010)『小学校英語の教育法—理論と実践』大修館書店
- 直山木綿子(2011)『英語ノート2を活用した英語活動の授業』小学館